

聖書:士師記6章1～24節

説教:主があなたとともにおられる

はじめに

イスラエルの民がヨシュアに率いられて神の約束の地であるカナンに入ったとき、そこにはすでにカナン人が住んでいて、バアルの神々を初めとする異教の神々が祭られていました。それでも荒野を旅してきた世代は、主への信仰を守り通すのですが、次に続く世代は主を捨てて、バアルの神々を慕って拝み、主の目に悪であることを行っていきます。今日の箇所もそうです。1節。「イスラエルの子らは、主の目に悪であることを行った。そこで、主は七年の間、彼らをミディアン人の手に渡された。」

いま、日本を初めとして世界はコロナウィルスの中で大きな不安のなかにいます。今朝の礼拝に出席するかどうか、悩みながら来られた方が沢山おられるはずですし、悩みながらも礼拝をお休みしなければならなくなった方々もおられます。つい一ヶ月前はこんなことになるとは誰も想像しませんでした。イスラエルがミディアン人を恐れたように、私たちはウィルスを恐れながら生活しています。このことを私たちはどのように考えたらいいのか、今日の箇所から一緒に考えてまいります。

1 ミディアン人

1) モーセの時代に起きた事件

まずミディアン人とは何者であったのか。話はイスラエルがエジプトから脱出して荒野を旅してヨルダン川をはさんだすぐ向こう側に約束の地が見えるところまで来たときにさかのぼります。その地域に住んでいたモアブ人とミディアン人は、大勢のイスラエル人が押し寄せてきたことにおびえ、まじない師であったバラムを呼び、イスラエルの民を呪ってもらいたいと依頼します。ところがバラムは依頼人の願いとはまったく正反対に三度もイスラエルを祝福してしまうということがありました

(民数記24章)。それで終わればよかったのですが、今度はイスラエルの若い男たちがミディアン人の女性に誘惑されて(民数記25章)、ほかの神々を拝むようになるという事件が起きます。これを知ったモーセは徹底的にミディアン人に復讐するようにと命じ、大きな争いとなったことがありました。

2) イスラエルを荒そうと入って来た

過去にそのようなことがあったわけですから、ミディアン人にしてみればイスラエルは憎き敵にしか見えません。彼らがイナゴの大群のように襲いかかってイスラエル人が育てた作物や家畜を容赦なく根こそぎ奪っていったのも、そのような事情があったのだらうと思われます。

いっぽう、イスラエルの側にしてみればこれは大きな災難です。一年かけて育てて収穫した食糧や家畜を全部奪って、いのちをつなぐ糧をいっさい残さない。それが七年も続きます。いつものパターンですが、本当に苦しいところに追い込まれたとき、彼らはやっと主に助けを叫び求めていきます。

2 ギデオン

1) 二つのステップを踏む

それで主は、イスラエルを救うためにギデオンを召し出していくわけです。でも、すぐにギデオンが呼び出されたわけではない。まず一人の預言者が現れ、「イスラエルの神主は、あなたがたをエジプトから上らせ、奴隷の家から導き出し、エジプト人の手を圧迫するすべての者の手から助け出した」と語ります。そう語ってから、11節で主の使いが来てギデオンを呼び出す。そのような二つのステップを踏んでいる。これはどういうことか。

ギデオンは、主の使いが来たときぶどうの踏み場で小麦を打っていました。ふつう小麦を打つのは風通しのよい小高い丘の上でやります。それなのに窪地のような低い所にあるブドウの踏み場で小麦を打つのは、いま収穫しているとミディアン人たちに気付かれないようにということです。

そんなある日、主の使いがやって来て「力ある勇士よ、主があなたとともにおられる」と言われる。それに対しギデオンは13節でこう言います。「ああ、主よ。もし主が私たちとともにおられるなら、なぜこれらすべてのことが、私たちに起こったのですか。『主は私たちがエジプトから上らせたではないか』と言って、先祖が伝えたあの驚くべきみわざはみな、どこにあるのですか。今、主は私たちを捨てて、ミディアン人の手に渡されたのです。」

ギデオンが神に対してずっと抱いていた疑問を、怒りの感情とともに主の使いにぶつけている印象です。皆さんどう思うでしょうか。主に選ばれてイスラエルを救うために遣わされていく。それはどんな人なのか。少年サムエルが「お話しください。

しもべは聞いております」と言ったように、いつも従順で、謙遜な人。そんな人が召し出されるのか。そう思っていたら、神に対して怒りをぶつけるギデオンが遣わされていく。

2) 三つの疑問

どういことでしょうか。最初に一人の預言者が遣わされ、次に主の使いが現れ、ギデオンを召し出す。ここは二段階になっていると言いました。このふたつはばらばらではない。実はつながっている。ギデオンはなぜ怒っていたのか。最初の預言者のことばを聞いていたからです。預言者は、神である主がエジプトからイスラエルを救ったと言うけれど、ではなぜ今このような苦しい中に置かれているイスラエルを神は救わないのか。そんな神に対する怒りが湧いてきます。

もちろんギデオンも考えたでしょう。なんとかしてミディアン人を追い払いたい。でも、自分の家は一族の中でも小さなグループだし、家族の中では末っ子です。とても何か大それた事ができるとは思えない。神に対して怒ると同時に、何もできない自分に対して腹を立てていたのかも知れません。そんな彼がどうして選ばれていくのか。

もう一度13節のギデオンが何を語ったのかを見てみます。彼は三つのことを疑っています。

一つ目。自分たちがミディアン人に苦しめられているのに、神は何もなさらない。本当に、主はともにおられるのか。これが最大の疑問と言っている。後に続く二つの疑問は、全部これと関連しています。

二つ目の疑問。イスラエルをエジプトから救った神であるならば、なぜこの苦しみのなかから神は救おうとなさらないのか。主は私たちを捨ててしまったのではないのか。

そして三つ目の疑問。「エジプトを救った力あるわざはどこにあるのですか。」自分たちはずっと待っていたのに、何も起きない。これら三つの疑問を総合すると、主が私たちともにおられない。そのようにしか思われたい。主は私たちを捨てたのだ。ギデオンはそのことで苦しみ、それが裏返しとなって怒りを主の使いにぶつけます。

3 主があなたともにおられる

1) 主からの答え

これは不信仰ということでしょうか。そうではありません。もしギデオンが神のことをどうでもよいと思っていたなら、腹も立てなければ、怒りもしなかったでしょう。神を信じたいと思う心が

人一倍強いからこそ、怒りとなって現すしかない。神に対して怒るのはよくないことだと、どこかで思い込んでいたかも知れませんが、そんなことはない。なぜそう言えるのか。ギデオンの疑問に対して主が一つ一つ丁寧に答えているからです。彼は、主は私たちともにおられないのではないかとの疑問に対する答えは12節。「力ある勇士よ、主があなたともにおられる。」

エジプトからイスラエルを救った神はもうなにもしないのではないかとの疑問に対して、主の使いはこう答えます。14節。「行け、あなたのその力で。あなたはイスラエルをミディアン人の手から救うのだ。わたしがあなたを遣わすのではないか。」

突然こう言われたらギデオンでなくても驚きます。目の前に立っているのはペテン師か、もしかして危ない新興宗教の勧誘かも知れない。自分はだまされているのではないかと疑う。これは当然でしょう。それで言うわけです。「私と話しておられるのがあなたであるというしるしを、私に見せてください。」それでどうなったか。21節。火が岩から燃え上がって目の前肉と種なしパンを焼き尽くすという不思議を見せる。

ギデオンの三つ目の疑問はなんであったか。神の力あるわざはどこにあるのか、でした。彼はいまそれを目の前で見せられた。それで初めて主の使いが言っていることは真実であると悟り、主のために祭壇を築いて、イスラエルを救うために召し出されていきます。

2) ギデオンを整えるために

最初に預言者が登場し、次に主の使いが出て来る。この意味は何かが分かりませんでした。でもこうして見ていくと、すべてギデオンを召し出すための準備であったことがこれでおわかりでしょう。初めに預言者を遣わしたのは、ギデオンが主の救いはないのかと怒りを燃やさせ、主に訴えていく力を与えるためであった。そのような主の導きです。

3) 何を恐れるのか

さて、これらのことから私たちはどんなことを教えられるのでしょうか。預言者は語りました。「わたしが主、あなたがたの神である。あなたがたが住んでいる地のアモリ人の神を恐れてはならない。」

ギデオンはアモリ人、ミディアン人を恐れていました。神の側から言わせれば、それは彼らが信じ

ていた神々を恐れているのと同じだということです。私たちはどうでしょうか。新型コロナウイルスの被害が日増しに拡大していくというニュースを聞けば不安にならない人はいないでしょう。でも、こんなときにこそ、私たちのうちにあるものが露わになってきます。主はこう言われました。申命記8章2節後半。「それは、あなたを苦しめて、あなたを試し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。」

私たちは日々、あなたは何を信じているのかと問いかけているのではないか。ウイルスに対しては、正しい知識を身につけ備えるのは当然でしょう。でもそれがすべてではない。私たちがすべきことはもう一つあることを忘れてはならない。私たちは何を恐れているのか。まるでこの世を滅ぼす神々のようにウイルスを恐れるのか。それともイスラエルを救うためにギデオンを召し出したように、私たちとともにいてくださって、罪人を救おうとご自分のいのちをお捨てになった方を恐れるのか。主の十字架は、この騒ぎの風が吹き荒れる中で揺れ動いて倒れそうになっているのでしょうか。そんなはずはない。主の十字架はこの世に何が起きようとも、揺るがされることなく堅く立っています。私たちはこの揺るぐことのない十字架の主を見上げて歩みます。